

令和元年6月19日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21503

研究課題名(和文)宋代を中心とする天文占書の研究

研究課題名(英文)The study about books on astronomical divination which makes Song

研究代表者

高橋 あやの (TAKAHASHI, Ayano)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：60734241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は天文占書を対象とする。『靈台秘苑』や『観象玩占』のテキスト調査をし実態を明らかにした上で、利用可能な資料とすることを目的とする。

本研究の研究成果として、以下の4点を挙げることができる。(1)『靈台秘苑』の2系統のテキストの実態解明、(2)『観象玩占』の朝鮮刊本の分析と日韓の受容の比較、(3)天文占書フルテキストデータベースの充実、(4)国際シンポジウム開催、である。(1)と(2)の成果は、学会発表や論文により公開予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでテキストの問題から等閑視されてきた天文占書の内容を分析し、実態を把握することで、『靈台秘苑』と『観象玩占』を研究資料として利用できるようにした。また、テキストの入手が困難なものもあり、それらを電子テキスト化しデータベースで公開することで、検索やテキストの参照を容易にした。

本研究は天文学史研究の基礎となる資料の整備を図るという基礎的な研究である。基本的ではあるが、当該分野の研究に必要不可欠な作業であり、今後これらの資料を用いて中国天文学の実態を解明し、さらには当該分野の研究を後世に繋げるための足掛かりとなるであろう。

研究成果の概要(英文)：This research targets books on astronomical divination. The purpose is to make available data after clarifying the actual situation by examining the text of "Lingtai-Biyuan (靈台秘苑)" and "Guanxiag-Wanzhan(観象玩占)".

The following four points are the achievements of this research. (1) The Elucidation of a text of 2 systems of "Lingtai-Biyuan"; (2) Analysis of Korean Books and Compare Japan-Korea acceptance of "Guanxiag-Wanzhan"; (3) Enhance the contents of "Full-Text Database of Books on Astronomical Divination"; (4) Holding international symposiums. In particular, (1) and (2) will be released.

研究分野：中国天文学史

キーワード：天文占書 靈台秘苑 観象玩占 朝鮮刊本 静嘉堂文庫

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

天文占書は、天文類書、天文五行占書とさまざまに呼ばれるが、歴代の書目で天文類に分類される文献の中で類書的形式を持つものをいう。内容は主に宇宙論や天文占、五行占、風や雲気による占い、暦や星の基本的事項であり、各天文書から占辞等を収集し、項目ごとに並べている。出典となる天文書のほとんどが現存しないため、中国の天文学史を研究するには、この天文占書と歴代王朝の正史(中でも天文志)が主要な資料となる。しかし、天文占書はしばしば禁書の対象となり、刊本や鈔本がわずかに現存するものの、鈔本ごとに文字や文の異同が多く、同じ書名でも内容が大きく異なる場合がある。そのため、四庫全書に集録される『開元占経』や他の一部の天文占書を除いては、来歴が明確でないために研究資料として用いられない状況にある。

近年、各天文占書の訳注や資料調査が進んでいるものの、これらの調査対象は、中国において人々がほとんど目にしなかったと考えられる文献が主である。東アジアの天文学史研究という観点で見た場合、より重要な資料が未だ手つかずとなっている。

2. 研究の目的

本研究では上記の状況を踏まえ、東アジアで実際に多く用いられたと考えられる資料を対象とし、内容を詳細に比較・検証して天文占書の実態を明らかにした上で、東アジア社会における天文占書の役割を明らかにすることを目的とする。

具体的には、中国の天文占・五行占を集成した天文占書のうち、北周成立・北宋重修の『靈台秘苑』、宋代から明代にかけて成立したと考えられ、多くのテキストが現存する『観象玩占』の資料調査を行ない、各文献の来歴や内容を分析し、これまで実態不詳で資料としての価値を持たなかった天文占書を研究資料として活用可能にする。さらに、歴史書等にみられる関連の記述を整理し、天文占書の実態についても検討する。

3. 研究の方法

天文占書は同じ書名でも内容が大きく異なることが多く、系統を整理しながら調査を進める必要がある。そこで本研究では、データベース(天文占書のテキスト検索を可能にする)で使用する電子テキストの作成(入力作業)と、文献調査・分析を行った。電子テキストの作成は『靈台秘苑』の2系統のテキスト、文献調査・分析は『観象玩占』(特に朝鮮刊本と他の鈔本の比較調査)と、『靈台秘苑』(静嘉堂文庫所蔵の2系統)を対象とした。

4. 研究成果

(1) 『靈台秘苑』の2系統のテキストの実態解明

主に日本で所蔵されるテキストを調査し、特に静嘉堂文庫に所蔵される2種(それぞれA本、B本とする)は、それぞれ内容が部分的に大きく異なることを明らかにした。

『靈台秘苑』は北周の庾季才によってまとめられ、北宋の王安礼らによって重修されたとされる。『靈台秘苑』は、もとは120巻だが現在15巻本のみを存する。藪内清氏は現存のテキストについて、「庾季才の原撰の姿が残っているかは疑わしい」と述べる。しかし藪内氏が提示した疑問について、これまで『靈台秘苑』のテキストが検討されることはなく、実態が曖昧なままに等閑視されてきた。研究資料としてもほとんど用いられていない。

A本とB本は、星座名の並びだけでなく、内容も部分的に大きく異なる。特に異なるのは、巻6、13～15である。巻6は、A本は目次に「天占」「地占」とあり、実際の内容は「天地占」として天地についての説明・占いがある。B本は目次には「天占 附雷及天雨物」とあるものの、実際には「天占」以外にも、「地占」「紫微垣」「太微垣」「天市垣」「東方七宿」「北方七宿」「西方七宿」「南方七宿」と、地についての説明・占い、三垣・二十八宿の説明がある。巻13、14は各星座の説明であるが、A本では去極度数など星座の位置を示す数値を記述するのに対し、B本では星座間の相対的な位置と性質について記述する。B本の場合、巻10から13までの三垣・二十八宿に関しては、去極度数を示すものの、その数値はA本とは大きく異なる。巻15は瑞星や流星に関する記述であり、項目は多くが共通しているものの、内容は大きく異なっている。しかし、部分的には似通っているため、源流は同じで、それぞれ多くの改変を経ていると考えられる。両者の星座の記述は、『宋史』天文志三と文が類似する。『宋史』天文志の藍本との関係が示唆される。

さらに、『靈台秘苑』が歴史的にどのように用いられたか、どのように現代まで伝わったのかについて考察した。『靈台秘苑』を引用する文献は多くなく、どれだけ世間で用いられてきたのか疑問が残る。ほとんどが重修後の引用であるが、唯一、『天地瑞祥志』の引用は唐代であり、現存のテキストにはみえず、重修前とわかる貴重な引用である。一つは風雨、もう一つは雨に関する占いである。雨という字は現行本巻6の天占に出てくるが、これは「血を雨らす」(雨血)、「肉を雨らす」(雨肉)など、天が物を降らせるという動詞の意味である。動詞の雨を用いた天占は『乙巳占』巻1や『開元占経』巻3、『観象玩占』巻1等にもみられ、天文占書ではよくみられる記述である。しかし、気象としての雨に関する記述は現行本『靈台秘苑』には見当たらない。特に前者の佚文は、風雨を陰陽と結びつけ、対比させる。現行本『靈台秘苑』は、巻5全体が「風気」と題する風占の記述である。風占、あるいは風角占と呼ばれる占いのみを挙げ、雨占については触れていないのである。『開元占経』や『天地瑞祥志』といった唐代に

成立した天文占書では、雨占と風占は同列に扱われている。『天地瑞祥志』に引く佚文が風雨を対比させていることから、重修前の『靈台秘苑』は風占と雨占を同列に扱っていた可能性が高い。もしそうだとすれば、重修後の『靈台秘苑』には風占のみがあり雨占がないため、篇目の構成が重修前と大きく異なっていると考えることができよう。

(2) 『観象玩占』の朝鮮刊本の分析と日韓の受容の比較

『観象玩占』の朝鮮刊本をソウル大学奎章閣韓国学研究院にて調査し、その特徴を分析した。また、日本(江戸時代)と朝鮮王朝における『観象玩占』受容の実態を比較した。

『観象玩占』は初唐の太史令(天文学を担当する役人)である李淳風(602～670)が作者であるという説と、元末明初の学者であり、太史令にもなった劉基(1311～1375)が作者であるという説がある。いずれも天文学に詳しい人物であるが、少なくとも李淳風は権威づけのための仮託である。成立時期についてもはっきりしたことはわかっていない。現存のテキストは多くが写本であるが、テキスト間で多くの相違がある。

奎章閣には現在4つのテキストがあり、うち3つは朝鮮王朝で刊行されたものである。刊本には巻43下が存在し、李靖述と記されている。巻四十三下の内容を見てみると、大部分は唐の李淳風『乙巳占』の巻九と重なる。唯一項目に番号が附される「候喪疾第九十八」も、『乙巳占』の陸心源刻本(十万卷楼叢書所収)の項目番号と同じである。管見の限り、『観象玩占』の他のテキストに巻四十三下に該当する部分はなく、『乙巳占』を部分的に交えたかなり特異なテキストが朝鮮王朝に伝わったといえる。日本や中国の他の鈔本との関係を見ると、朝鮮刊本は巻数が四十七巻で、他の四十九巻本、五十巻本よりわずかに少ない。

歴史書の記録を見ると、朝鮮王朝において『観象玩占』は、中国の天文知識を伝える重要な文献とみなされていたことがわかる。特に肅宗・英祖期において、比較的重視され実際に観象監で使用されていた。一方日本では、江戸時代に幕府の御文庫(紅葉山文庫)や尾張徳川家、加賀前田家など有力大名が所蔵し、限られた人々しか目にする機会がなかった。おそらく、中国の天文書が手元にあるというだけでステータスであり、実際に利用するという考えはなかったものと考えられる。紅葉山文庫の『観象玩占』は、申請すれば幕府の奉行や学者も借り出すことはできたが、積極的に利用されていたとは考えにくい。日本の場合、『観象玩占』自体は複数舶来していたが、他により信頼に足る天文書があり、実際の天文現象について検証する際には用いられなかったということであろう。

(3) データベースの充実

報告者が以前作成した「天文占書フルテキストデータベース」の対象テキストを増やし、さらに充実したものとするため、電子テキストの入力を進めた。本研究機関には『靈台秘苑』の2種のテキストを入力し、現在公開準備を進めている。

(4) 国際シンポジウム開催

2018年9月8日に高橋産業経済財団助成との共催で国際シンポジウム「『天地瑞祥志』を中心とした前近代東アジア思想・文化の総合的研究」を開催した(於山梨県立大学)。本シンポジウムでは中国天文学史研究者である孫英剛氏(浙江大学歴史系教授)が天文占と政治との関係について報告するなど、本研究課題と密接な関わりを持つ報告を行い、活発な議論がなされた。また、申請者は清水浩子氏の広告に対するコメンテーターを担当した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

高橋あやの、『観象玩占』にみる東アジアの術数文化、勉誠出版、水口幹記編、前近代東アジアの術数文化、査読無、2019(刊行予定、掲載決定済)

高橋あやの、『靈台秘苑』のテキストについて、京都大学人文科学研究所、武田時昌編、天と地の科学、査読無、pp.300 - 315、2019

高橋(前原)あやの、五宮から三垣へ 星座分類の変遷の考察、東方宗教、査読有、第128号、2016、pp.1 - 18

前原あやの、天文占書の解題と「天文占書フルテキストデータベース」の意義、関西大学東西学術研究所紀要、査読有、第49輯、2016

[学会発表](計4件)

高橋綾乃(あやの)、日蔵漢籍(靈台秘苑)的比較研究(中国語)、写本文化と跨文化交流国際学術検討会、2019(発表予定)

高橋あやの、中国の宇宙論について、紅樓夢研究会、2019

高橋あやの、『靈台秘苑』の比較研究、東京ミーティング2019.3、2019年

高橋あやの、『靈台秘苑』『観象玩占』のテキストに関する検討、2017年度第三回科研費課題検討会、2018年

(図書) (計1件)

高橋あやの、汲古書院、張衡の天文学思想、2018、384

(その他)

ホームページ等

<http://www.temmon.org>

国際シンポジウム開催

『天地瑞祥志』を中心とした前近代東アジア思想・文化の総合的研究、共催、2018年

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。